

連続講座「国民国家と多文化社会」第9シリーズ

複 数 の 沖 縄

第1回 6月2日(金)

報 告：中村 尚司(龍谷大学経済学部)「地域自立と石垣島」

コメンテータ：西川 長夫(立命館大学国際関係学部)

石原 俊(京都大学文学研究科院生)

第2回／6月9日(金)

報 告：大橋 愛由等(神戸奄美研究会主宰)「複眼の琉球弧」

コメンテータ：リム ボン(立命館大学産業社会学部)

森 宣雄(大阪大学文学研究科院生)

第3回／6月23日(金)

報 告：仲程 昌徳(琉球大学法文学部)「アメリカのある風景」

コメンテータ：大空 博(立命館大学国際関係学部)

第4回／6月30日(金)

対 論：仲里 効(EDGE編集長)+新原道信(横浜市立大学商学部)

「境界のこえかた～沖縄・大東島・南洋～」

コメンテータ：崎山 政毅(神戸市外国語大学外国語学部)

第5回／7月7日(金)

報 告：東 琢磨(音楽評論家)「沖縄：うたの遍在する＜場＞」

コメンテータ：高嶋 正晴・尾場瀬一郎(立命館大学産業社会学部)

第6回／7月8日(土)

コンサート：大島 保克(唄者・石垣島出身), 照屋 林山(唄者・沖縄本島),

きじむなー(学生グループ)

解 説：東 琢磨(音楽評論家)

場所：立命館大学アカデメイア立命21 K209会議室

(第1回は明学館82号教室, 第6回は中野記念ホール)

時間：16:30～19:30

複 数 の 沖 縄

立命館大学国際言語文化研究所では1994年から8回にわたって、地域を区切りながら、民衆の、また文化の「国民化」がひきおこす問題を様々な角度から取り上げてきた。今後もこうした過去の実績を踏まえつつ、他方では、国旗国歌法や周辺事態法の制定など、新たに「国民国家」の強化が進められようとしている日本の現状に対する抵抗可能性をも探りながら、さらなる遠近法を試していこうと思っている。

今年は「九州沖縄サミット」の年でもあるが、こういった時にこそ、「沖縄」はあらためて問われるべきであるし、また沖縄関連図書の出版が相次ぐ中、そういった同時代現象を視野に入れた「沖縄問題とは何か」という問いの問い方が問題になる。

まず、「沖縄」は「日本」の「内」なのか「外」なのか？「沖縄」を問うことは「境界」を問うことである。「沖縄」を「日本」に含めようとする力と、「日本」から排除しようとする力とは、往々にして、

共犯関係にある場合が少なくない。しかも、その力と力のせめぎあい、そしてその共犯の記憶を「沖縄」はくりかえし歴史的記憶として身体化・体内化してきたが、逆に「日本」はその記憶そのものを抑制隠蔽してきた。おそらく、こうした記憶のありようのズレの中に境界はあるのかもしれない。

次に、「日本」の思惑を超え、「沖縄」が周辺地域や北米・中南米とのあいだに築いてきた環太平洋的な交通の記憶は、これからいったい誰が誰のために語り継いでいくべきものなのか？

さらに「沖縄」それ自体が決して均質ではない。「奄美」「宮古八重山」「大東」—それぞれが「沖縄」との差異の中でしか表象が困難である。そういった固有な名は、いかに文節され、接合されるのか？

このシリーズではこうしたミクロな問題にひとつひとつ光をあてながら、新しい問いの立て方を追求したい。

